

熊本の騒動機に 都内市区議語り合う

議員と子育て

両立の悩み

熊本市の女性市議が先月、許可なくゼロ歳児の長男を抱いて議場に入り騒ぎになったことを機に、議員活動と育児の両立についての議論が、地方議員の間で改めて活発になっている。東京都内では、子育て中の議員が集まって座談会を開き、悩みを打ち明けた。

(柏崎智子)

若手女性議員でつくる「ウーマン・シフト」代表・本目さよ(台東区議)が呼びかけた座談会は六日、豊島区で開かれた。男性も含めた区議・市議七人が集まった。

熊本の女性市議の行動をどう見たか。「議席に連れていかなければならない状況は想像しにくい」と懐疑的な見方もあったが、あきる野市の子籠敏人市議(同)は、議員の子育てに社会の関心呼び起こした点で「いいボールが投げられた」と前向きにとらえていた。

板橋区の南雲由子区議(同)は、八カ月の長男がいる。「仕事に家庭を持ち込む」「議員の仕事は片手間にはできない」などネット上で飛び交った声に「だんだんつらくなった」と言う。当事者だからこそ子育て世代の実感を議会でも代弁できると思いながらも「仕事も子育ても

中途半端になるのでは」と不安はある。そこを責められているように感じた。

中野区の森隆之区議(同)は「傷付きそうだからネットなどは見なかった」。三歳の長女との触れ合いをツイッターで発信するが「二十四時間、議員活動するのが務め」という区民の視線を感じるという。議員が保育所を申し込むことにも後ろめたさがある。

ウーマン・シフトの調べでは、全国の市区町村議員のうち、二十、三十代の女性はわずか0.6%。背景の一つとして、出産や育児で休むことの難しさが挙げられた。

新宿区の鈴木ひろみ区議(同)は、区議になって二人を出産した。区議員の規定を援用し産休は取得したが、産休は「任期のある議員にはやむを得ず、制度化は難しい」と見る。根本的な問



結婚や子育てとの両立に何かが必要か書き出しながら、日々の思いを語りあう市議や区議ら。東京都豊島区で

託された一票「欠席でも投票可に」

題として「議決権は重い」という声も上がった。一票を住民から託されているのに、議場に行かないと投票できないから簡単に休めない。

豊島区の有里真穂区議(同)は、妊娠八カ月で早産手前の「切迫早産」になった。医師に自宅安静を言われても入院するまで議会を休まなかった。「欠席でもあらかじめ投票内容を議長に伝え、投票できるしくみは作れないか」と提案した。

子どもを議場に連れて行かないまでも、住民に要望を聞く場への同席は許可された事例も報告された。中野区の中村延子区議(同)は「まずはできたことを『前例』として広げていこう」と呼び掛けた。

板橋区議会柔軟対応

控室に預け議会へ「一つのモデルに」

板橋区議会では13日の議会最終日、南雲由子区議が長男を議会内の会派控室でベビーシッターに預けて本会議に出席した。事前に所属会派と議長、議会事務局に了承を得て初めて実現した。シッターは区の有償ボランティア事業「ファミリー・サ

ポート・センター」に自費で派遣を頼んだ。

控室に子ども用の設備はない。南雲区議は、長男が床で遊ぶようマットを持参。一人掛けのソファを二つ向かい合わせにして即席のベビーベッドにした。

議会は午前10時に開会し、昼食休憩を挟んで午後2時ごろ終了。その間、長男はシッターの

女性(68)に区役所内の子どもスペースや屋上庭園にも連れ出され、機嫌良く過ごした。

南雲区議が所属する「市民クラブ」の高橋正憲幹事長は「私も共働きで子育てし、大変さは分かる。一つのモデルになったのでは」。大野治彦議長も「若い議員が増えれば、今後もうこういうケースは出てくる。柔軟な対応が求められる」と語った。



会派控室でベビーシッターの女性(左)と遊ぶ南雲さんの長男(右)＝東京都板橋区役所で